

「錠口」狭山藩北条氏の上屋敷にも「大奥」があった

江戸城に将軍が住んでいた時代、江戸城内に大奥と呼ばれる男子禁制の女性だけの暮らす場所が存在したことは、よく知られている。しかし実際は、大奥にも男性がいた。

大奥は、御殿・長局・御広敷の三つの区域に分かれていた。御殿は将軍の寝所や御台所(正室)の居所のほか、大奥女中の詰め所などがある所。長局は奥女中たちの住まい、そして御広敷は、大奥の事務や警護を担当する男の役人や賄い方の男料理人が詰める場所である。したがって、大奥の中の御広敷には男性がいたのである。

江戸城で将軍が大奥の御殿へ出向くときは、鍵のかかった「錠口」を通る。「錠口」には錠口番が将軍の住居である中奥と、大奥の両方の側において番をしている。江戸城には「錠口」がもう一カ所ある。御殿と御広敷の間にある。ここは警戒が厳しく、御殿側では女の錠口番が、また御広敷側では男の役人が出入りに目を光らせていた。

実は将軍の住む江戸城だけではなく、大名の住む江戸の武家屋敷にも、規模の大小の差こそあれ奥が存在し、なおかつ「錠口」も存在した。一般的に大名の武家屋敷の構造は、表向と奥向に区分される。表向は儀礼・対面・政治の場であり、書院や表向の役人の詰め所があった。奥向は表方と奥方の二つに分けられ、表方には大名が日常の政務をとったり日常生活を送ったりするための居間や寝所、それに大名に仕える武士の詰め所があった。奥方には、大名の妻子が日常的に生活する空間や、大名夫人に仕える奥女中の控える部屋などがあつた。ここが、江戸城では大奥と呼ばれる部分である。

江戸城の大奥は、大名屋敷では奥向の奥方にあたる。したがって、大名の正室は奥向きの奥方にいることから奥方、あるいは奥様と呼ばれた。

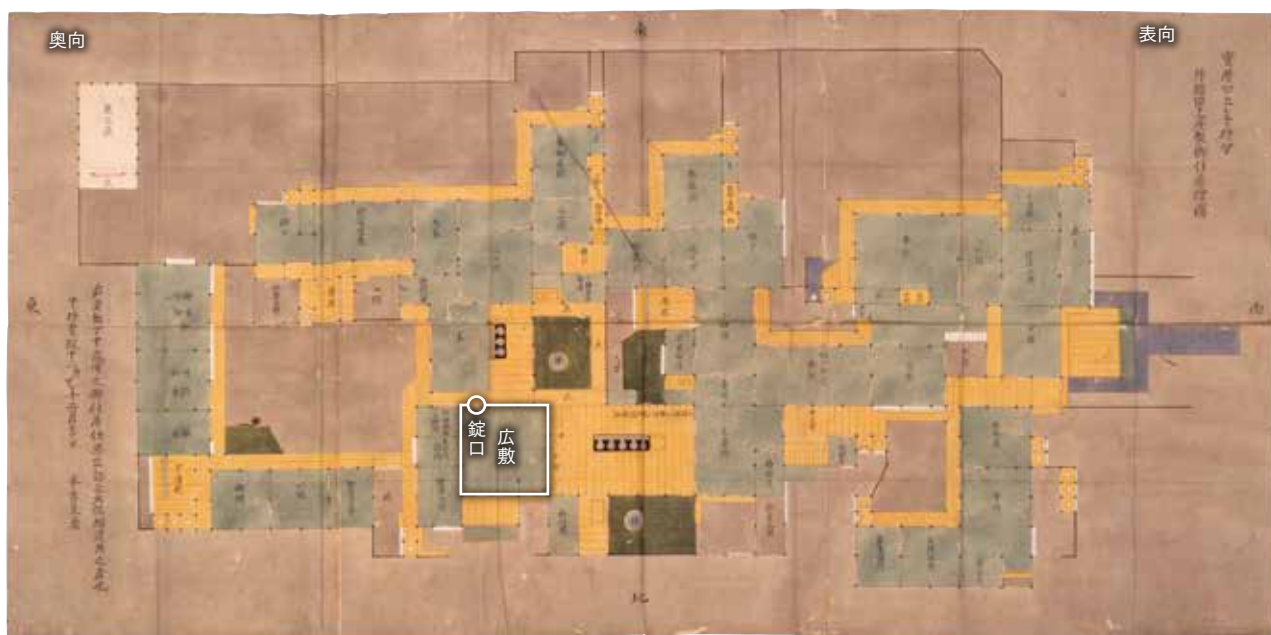
江戸時代を通じて十二代続いた狭山藩北条氏の上屋敷にも、江戸

城と同じように奥があり、かつ「錠口」もあつた。北条家に伝来した文書の中に「外桜田上屋敷図」があり、そこに「錠口」が描かれているのである。

この絵図では、「錠口」は広敷と奥方の間にあり、「錠口」の内側にある奥方に男性が入ること、また奥方から「錠口」の外へ女性が出ることは制限されていたのであろう。奥向は性差に基づく規範により制度化されたジェンダー空間として維持・管理されていたのである。これらは、江戸城における大奥と全く同じで、江戸時代には將軍家や大名家は規模の大小はあるにせよ、同じ奥向構造をもっていたのである。一葉の絵図が教えてくれた。

追伸

なおこの絵図は、令和元年十二月七日から狭山池博物館で始まる郷土資料館特別展「さやまのお殿さま―藩主北条氏の足跡―」で展示されます。



外桜田上屋敷図